2023年6月25日　主日礼拝

説教題「わたしはぶどうの木」ヨハネによる福音書 15 章 3～5 節、16～17 節

主任牧師　加藤　誠

「父がわたしを愛してきたように、わたしもあなたがたを愛してきた。わたしの愛にとどまりなさい」（ヨハネ15章9節）。

先週の「教会音楽感謝礼拝～菊地音楽主事の働きに感謝して～」は恵みあふれる礼拝となりました。オープニングで若者たちがバンド演奏で賛美を届けてくれましたけれども、教会学校に集う子どもたちが思わず口ずさみたくなるオリジナル賛美が与えられているということは、なんと素敵な恵みなのだろうかと思いました。

賛美歌には不思議な力があります。賛美は私たちの心に染みて、私たちを神の愛につなげ、神のもとにある安らぎや勇気、希望を注いでくれます。日常生活のふとした時に賛美歌を口ずさむことで、私たちの心にイエス・キリストの信仰が呼び起こされていきます。賛美する若者たちの姿を見ながら、賛美歌が育んでくれる信仰の力、一緒に賛美する仲間が与えられている恵みの大きさを想いました。

また賛美は伝道の大きな力です。あけぼの幼稚園を卒業しても保護者の OB・OG の方々が賛美の奉仕で教会につながり続けてくださっていることは大きな驚きです。単なるコーラスグループではないのです。あけぼの幼稚園の働きがあり、バイブルクラスがあり、第一礼拝の礼拝と分級などを通して、お一人お一人の中に育まれてきた「神さまとのつながり」が「あけぼのコーラス」と「父親コーラス」を成り立たせているのです。そう考えると「教会音楽」「教会学校」「あけぼの幼稚園」がそれぞれ単独ではなく、「総合」されて主を証しし、教会を形づくる働きとされていることを再認識させられました。

そして教会音楽の働きが、毎週の礼拝奉仕者たちの信仰を強め、共に教会を形づくる働きを強めていることを想いました。今朝の礼拝に参加するために皆さんは何日前から準備をされたでしょうか。音楽奉仕者たちは何日前、時に数週間前から礼拝のために練習を積み、祈りを重ねています。聖歌隊もハンドベルクワイアも、毎週水曜日の練習がその奉仕を支えています。準備は大変ですが、しかし練習の積み重ねが、実は奉仕者一人ひとりの祈りを強め、共に教会を形づくる信仰を強めているのです。そういう意味でも、この機会に、教会音楽の奉仕を担いたいという方が一人でも増えて与えられることを祈っていきたいと想います。

さて、今朝はそのように主を証しし教会を形づくる、大切な「賛美の源泉」、「賛美を賛美にするもの」について聖書から聴きたいと思います。

ヨハネ 15 章で主イエスは繰り返し「主イエスにつながること」「主イエスの愛の内にとどまること」の大切さを語ります。「神賛美（神をほめたたえること）」は私たちの心の中に自然に沸き起こってくるものではありません。私たちはどこまでいっても「自分中心」「人間中心」だからです。わたしは、自分にとって心地の良いものは喜べますが、自分の意に沿わないものは喜べません。自分と考えの似て

いる人たちと一緒に喜ぶことはできても、自分の考えと違う人、まして利害が敵対する人たちと「一緒に神を賛美すること」などできません。それが私たちです。そんな「独りよがりな私たち」がイエス・キリストの愛と言葉につなげらて「神を賛美する者」に変えられるのです。今朝のヨハネ15章には「つながる」という言葉が繰り返されていますが、実はこの言葉の本来の意味は「とどまる」という意味です。新共同訳では7節「あなたがたがわたしにつながっており、わたしの言葉があなたがたの内にあるならば…」となっていますが、新改訳では「あなたがたがわたしにとどまり、わたしのことばがあなたがたにとどまっているならば…」となっていて、この訳の方が原文のニュアンスを正確に伝えています。「つながる」というよりも「とどまる」ようにと、繰り返し主イエスは語っておられるのです。「とどまる」＝「どこかに行ってしまわずに、動かないで居続ける」。なぜなら私たちは放っておくとすぐに主イエスの愛やことばから離れてしまうからです。ふだんの自分の行動を省みる時、わたしたちは主イエスの愛や言葉に「とどまる」よりも、どんどんと自分の思い、感情、自分の判断で動いていってことがなんと多いことでしょうか。だから意識して「とどまるようにしなさい」「わたしの言葉と愛の内に、じっとしていなさい」と主イエスは語られたのです。

この「じっととどまりなさい」という主イエスの語りかけに、マザーテレサの「祈りの第一は沈黙です」という言葉を想い起しました。私たちは「祈り」というと「神に何か話さなければならない」と考えるのですが、「何も語らなくていい」「黙って、じっと神さまの前に座りなさい。それが祈りにおいて一番大切なことです」というのです。キルケゴールは「もしわたしが医者であり、世界中の人たちに薬を処方するとしたら、沈黙という薬を処方する」と語っています。「この世界はなんと人の声であふれて、騒々しいことか。キリストの声を聴かせてくださいと黙ること。それこそが私たちに最も必要なものです」と。

しかし実際に「沈黙する」ことはなかなか難しいことです。礼拝堂に静まって座っても、雑念が次から次へと浮かんできます。でもある時、その自分の雑念とそのまま向き合うことが祈りの第一歩だと学びました。憤りや不安、失望や文句など、次々に雑念が溢れてくる自分をじっと見つめるのです。そんな雑念があふれてくる素のままの自分を神さまの前に置くのです。そうしていると「そのままで君はほんとうにいいと想うか？」という主イエスの言葉が聞こえてきます。聖書を開くように促されます。そして、実は憤りや不安、失望や文句以上に、感謝すべきことがたくさん与えられていること、自分の言動に対する反省などが示されて、神さまへの賛美に導かれていくのです。「神賛美」は私たちの中に自然に生まれるものではありません。主イエスの愛のうちに「とどまり」、主イエスの言葉に「とどまる」中で、「神賛美」は私たちの中に与えられていきます。

これからも大井教会が「賛美」を大切にする教会でありたいと願うなら、これまで以上に、神さまの前に沈黙することを学び、聖書を開いて静かに祈ることを共に大切にしていきたいのです。神の前の沈黙にこそ、賛美の源泉があるのですから。